

ハーバード日記——誤算と誤解から——

国際日本文化研究センター 江上 敏哲

地図を読むカタログの話

丸1年続いたハーバードでの滞在生活も、あと10日ほどで終わろうかという日のこと。学内ライブラリアンの勉強会を、いつものようにそつと聴講していると、見知らぬ女性がそばに寄ってきて、「よく見かけるけど、ジャパニーズ？ コリアン？ 日本語わかる？」と話しかけてくるのです。「自分はイエンチン（ハーバード大学の東アジア分野図書館）のビジティング・ライブラリアンで、まもなく日本に帰国する予定である」と説明すると、意外そうな顔をしつつも、「ちょっと手伝って欲しいことあるんだけど」とおっしゃる。聞けば彼女は地図専門のカタログで、最近見つかった日本の古地図数点に悩まされている。よかつたら一緒に見てアドバイスをくれないか、と。なるほどそういうことなら、イエンチンで実際に古典籍の目録を仕事としてやっていますので、その場で快諾して、後日彼女のオフィスにうかがいました。

まずは挨拶代わりの世間話から始まるわけですが、彼女の英語がかなりの早口、しかも若者口調のそれで、パンクロックかのようなおしゃべりのほんの一端すら、何をおっしゃってるやらさっぱりつかめない。これはマズい、なんとか引き受けたけども、こども英語的に太刀打ちできんとは、と泣きそうになつていたのですが、さていざ問題の日本の地図、幕末・明治あたりのそれを実際に広げ、ディスカッションが始まってみると、英語自体の聴き取れなさに変わりはなく、英語自体の聴き取れなさに変わりはなく、コミュニケーションがとれるのです。特に、「そのpartは版？ 刷？」だの「情報源上にならぬから角括弧で」だの「生没年わかる？」「いや、有名人だから典拠レコードはすでにある」だのという目録実務に関わる話題は、相手の言いたいことが手にとるようにわかるし、自分も自信を持って伝えることができる。他にも、出版事情や歴史的背景（このエリアは何？」「エンペラーの住居で、さっきの地図ではシヨーグンの城だったところ」）など、馴染みのある話題であればあるほど、スムーズに会話が進むという経験をしました。

もつたない英語教師の話

2007年3月から1年間、当時在籍していた京都大学附属図書館からの派遣で、ハーバード大学イエンチン図書館に実地研修のため滞在しました（当時の様子は <http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/>

modules / wordpress / にて報告）。得難い経験も多数あった反面、失敗や後悔も少なくありません。最大の誤算は、丸1年アメリカにいたのに英語力なんかほとんど向上しなかった、ということ。日本人スタッフに囲まれ、日本の古典籍を扱うのがメインだったこともありましたが、それを差つ引いても、海外に「いんだだけ」で英語が自然に聴き取れることはないんだと痛感しました。

が、語学としての英語力よりもむしろ、会話のコツやコミュニケーションのとり方の傾向と対策に触れることができたこのほうが、収穫だったと思います。とにかく皆さん、よくしゃべり、よく話す。それは「おしゃべり好き」なだけでなく、業務連絡や協議も、メールや文書よりもまず会って話す、集まって話す、電話で話す。学内の見知らぬシステム部署から、ログインIDと初期パスワードが電話で伝えられてきたときには、さすがに驚きました。この広いハーバード（ライブラリアンだけで1,200人！）で個人の特定期もままならないだろうに、電話で名前を確認しただけで口伝えするのか？ と。逆に、メールで問い合わせを送っても返事が来ないことなんか、しょっちゅうです。こちらはもう送ったんだから次は向こうが応える番だろう、せっついても悪いし、と待っていても、返事は来ないし事態は進まない。それは放置でも多忙でもなく、電話なり会ったついでなりにプッシュすれば、その場で返事がくる。じつとしていた自分が要領悪いだけか、とほどなく気付きました。

日本びいきで親しくしていた彼女と、クラス終了後にディスカッションしてみた結果、どうやら損をしているのは日本人だけらしい、という結論に落ち着きました。余談ですが、このクラスの先生はかつて新潟に2年ほど滞在していたそうです。当時のビデオテープの中では、実に流暢な日本語で祭り文化の日米比較をコメントしていた先生ですが、残念ながら現在では少しの単語しか覚えていない、「モツタイナイね」と苦笑していました。

字が読めない院生の話

もともと自分の興味関心が、海外での日本研究資料とその図書館、というテーマでもあり、当地で日本について学び研究する学生に多く出会いました。

ある院生の資料読解を手伝ったことがあります。彼女は中国系で、戦前の日本人のアメリカ移住を研究していたようですが、当時の書簡の写しが束で手に入らず、ところが書簡独特のくずし字が読めない、代わりに翻字して欲しいという依頼でした。が、実は彼女、くずし字どころか通常の日本語も読み書きできないといえます。美術や政治・経済だと日本語を学ばない人も少なくないようですが、歴史研究でそれはやや不審です。「私が翻字しても、あなたは理解できないのでは」と問うと、「いいのいいの、日本語わかる友だちが英訳するから」と無邪気に早口でまくしたてます。1ヶ月後に完読したときには謝金までいただきまして。随分とドライではないか、研究する

なら言語を学ぶべきでは、とも思いますが、読めない外国語資料であつても考え得る方法を駆使して積極的に活用しようとする、ある種の食欲さは、研究者向きと思えなくもありません。

彼女は極端な例でしょうか。アメリカで出会った日本研究の学生は、たいがい皆、日本語を習得していました。University of Massachusetts Amherst という大学を訪れ、いくつかの授業に参加したことがあります。院生対象のくずし字講読の授業では、20人弱の学生が竹取物語の写本を読んでいた。週一回・40分程度の授業で、8週目にして変体仮名はほぼ読めていたようでした。また、学部4回生以上を対象とした文献探索の授業では、図書・論文等の検索・入手が指導されていました。出題されていたのはこのようなものです。「英題を『The Thief』という谷崎潤一郎の作品の、原題は何か。この英訳を収録する図書と、日本語の原作を収録する図書を示しなさい。」存外にハイレベルで、恥ずかしながらしばし考え込んでしまいました。日本語を習得している彼らにしろ、わからないという前述の彼女にしろ、外国語文献への食欲さは同じかもしれません。米国の様々なライブラリアンに収書の話やうかがう機会がありました。海外の資料を逃さず集めようとする熱意には学ぶことが多いように思います。

てそんなことはないと思います。人文系に限らず、工学・技術分野の日本語文献であつても、食欲な理系研究者はなんとかしてそれを読もうとします。

Excelをいじるライブラリアンの話

数人のライブラリアンとExcelを使った分担作業をしていて、ファイルを分割して各自入力し、再度結合しようという段取りになりました。数日後に持ち寄ったのですが、なぜか元通りにならぬい、というの、ある人の表に列が追加されているのです。必要と思つて追加した。便利でしょ、と。ほかの人の表にも、判断の結果か、記号や色分けが追加されていました。

Excelの結合には失敗しましたが、各自が自主的に判断をするというこの姿勢は、日本の図書館・図書館員がもつと見習うべきことではないか、と私は思います。滞在中にハーバードや米国内のいろいろな図書館を拝見し、多くのライブラリアンと接してきましたが、運営・サービスの方法、考え方、取り組み方には実に様々なものがありました。同じ大学図書館であつても、蔵書・ニーズ・研究動向は大学によつてまったく異なります、それに応じて、資料の取り扱い、サービス方針というものも千差万別です。当然とも思えますが、実際、日本の図書館運営は、どうしても横並びになつてしまいがちです。機関リポジトリやラーニング・コモンズにしても、日本での取り組みは本当に各館が自主的に

その意義や効果を検討し、判断した結果と言えるでしょうか。運営方針だけでなく、システムや広報、ダジャレで愛称をつけることまでもが横並びの有り様が、真に自主的な判断の結果とは思えません。ハーバードでオープンアクセスについてのミーティングを拝聴しましたが、すでに他所で議論し尽くされたような基本的な懸案事項について、ひとつひとつディスカッションされていきました。オープンアクセスの意義や効果を一般論として認めるにもしろ、ハーバードにとつて、自分達にとつてそれがどういう意味を持つのか、ということに、自身の問題として真摯に取り組んでいることの表れではないかと思えます。決して「よそがやつてるから」「誰れが言うから」ではありません。多様な図書館運営・サービスが各所に存在する。どれが正解とも言えないし、とるべき道もひとつではない、ひとつである必要はない、と思います。

地図のカタログや英語の先生には、帰国後、Facebook上で再会しました。カタログの彼女はラテン語が難しいとよく愚痴っています。私が「朝食に何を食べるべきだろうか」とつぶやくと、「オレンジジュースとベーコンエッグ」などとコメントを返してくれる気さくな人です。ただ残念ながら英語の先生からのコメントはありません。ちつとも英語の成長しない不出来な生徒に愛想が尽きたのでなければいいのですが。

(資料課資料利用係長)